

編集の序

本書は検査値，特にルーチン検査の見方を変えるための本です。臨床検査は診療において日常的に行われていますが，その検査結果を十分に活用できている医療者は少ないと思います。ルーチン検査を日常診療に活かせるようになるためには，いくつかのステップが必要です。まずはじめに，ルーチン検査は病態を把握するための検査であるという認識をもつことです。次に基本的なルーチン検査の項目の変動の要因を理解し，そのうえで実際の患者データを読み，病態を考えることをくり返すことが必要となります。私自身，日常診療でルーチン検査を意識していることで，患者の病態の把握がより深く正確になったと自覚しています。検査だけで診療はできませんが，より適切な診療を行うには，検査値の適切な解釈が必要なのです。1人でも多くの医療従事者に本当の意味でのルーチン検査の読み方を知ってもらい，診療に役立ててもらえればと思い，本書を企画しました。

本書は全4章で構成されています。まず，第0章で先ほどから何度か出てきているルーチン検査とはどういう検査なのか，それを解釈するとはどういうことなのかを述べます。次に，第1章でルーチン検査から病態を把握するための検査値の読み方を解説します。どういう視点で検査値を見るのかとその評価を行うために注目すべき検査値について説明をしています。第2章では，具体的な疾患ごとにルーチン検査がどのように変動するのかという点と，治療による検査値の変動について解説をします。患者の治療効果判定には，自覚症状や診察所見，バイタルサインなどが重要であることはもちろんですが，臨床検査も判断材料になります。ルーチン検査の結果の変動から改善または増悪を判断することができれば診療に役立ちます。最後の第3章では，診断と治療の経過においてルーチン検査をどのように解釈するのかという点を含め，症例をあげ解説しています。臨床現場で実際にどのように臨床検査を用いるのか，また診断だけでなく病態をどうとらえるかがみえてくると思います。

本書の執筆は，実際に病院の第一線で活躍をしている臨床検査専門医の先生方をお願いをしています。臨床検査専門医というとなじみがなく，何をしているのか知らない人が多いでしょう。実際には，臨床検査全般の知識があるだけでなく，さらにサブスペシャリティーとして骨髓検査（血液内科）や細菌検査（感染症内科）といった専門性をもつ医師です。臨床検査専門医についてはコラムでも紹介していますのでご一読ください。

最後になりましたが，ご多忙のなか，執筆にご協力いただいた先生方，本書の企画から完成までご尽力いただいた羊土社の藤澤 優さん，森 悠美さんをはじめ，関係者の方々に心から感謝を申し上げます。

2024年2月

信州大学医学部附属病院 臨床検査部

松本 剛